

「HUMO」by ラファエル・ロサノ＝ヘメル+ブライアン・マスマ
文＝四方幸子 Text by Yukiko Shikata

「HUMO」。「Huge」と「Mobile」という、通常出会うことのない二つの言葉が遭遇したプロジェクト名は、「Humor」（ユーモア）を想起させるとともに、未知のものへの投金（ルビ：プロジェクト）を感じさせる。メキシコ系カナダ人のメディア・アーティスト、ラファエル・ロサノ＝ヘメルが、ブライアン・マスマ（メディア論）と共同で構想した「HUMO」は、巨大なモバイル、つまり巨大な高輝度スライド・プロジェクター（12万アンシ・ルーメン）をトラックに搭載し、夜間都市のさまざまな場所に出没して建物その他にゲリラ的に映像をプロジェクションしていくものである。

寒さが厳しい今年の2月、オーストリア北部の都市リンツで敢行された第一弾にはアーティスト12人が参加、それぞれプロジェクションを行なう建物を事前にリサーチするプロセスを経てロサノ＝ヘメルの参加のもとワークショップとして実施された。廃墟、倉庫、工場、人が住む巨大アパート、ひいては汚染された空気…。ここでは都市のあらゆるものがプロジェクションの対象となる。都市の日常に埋没してしまい見えないもの、誰も見向きもしない平凡な風景もしくは荒れ果てた場所こそが格好のサイトである。

ロサノ＝ヘメルは、「都市にはイメージ（映像）が足りない」という。都市にはイメージが溢れているのに…？彼はいく、誰が都市にイメージを氾濫させているのか？そして誰のために…？

ガソリンタンクにブッシュ大統領、殺風景なアパートにソーセージなど、現代美術、映像、メディア・アーティスト、アクティビストなどによる批評的ユーモアをこめた映像が、既存空間に投影される。投影は数秒のみ、即座に写真を撮影しそこから退散することが鉄則である。誰にも気づかれず何も痕跡を残さない、瞬時のゲリラ的な都市への介入。「T.A.Z.（一時的自律ゾーン）」（ハキム・ベイ）の浮上、非物質的なグラフィティ…。

「HUMO」は、30年代にシュルレアリスムにより開始され、50年代のシチュアシオニズム、60年代以降のストリート・アートやカルチャー、ひいてはネット上へと引き継がれている日常生活批判や都市への介入、つまり日常的無意識のハッキングという姿勢を受け継ぐものである。それはまたその都市において、ふだん表象されえない、隠されているもの—社会・経済・歴史的背景—をあらためて浮上させる試みでもある。ロサノ＝ヘメルとマスマは、このプロジェクトを匿名的なワークショップとして複数のアーティストに解放した。それはまた、さまざまなコンテンツを搭載可能な創造のための一種のフリーツールともいえる。誰でもこのメソッドを転用し、世界各地で応用・展開できるのだ。

ヘメルは、「リレーショナル・アーキテクチャー（関係性の建築）」という、人々の参加に関く大規模なインタラクティブなパブリック・プロジェクトによって、世界的に注目されるメディア・アーティスト。リンツでの「HUMO」の記録は、今後出版される予定。彼の新作インタラクティブ・パブリック・プロジェクト「アモーダル・サスペンション—飛びかう光のメッセージ」(www/amodal.net)が、11月1日に開催する山口情報芸術センター(YCAM: ☎083-901-2222)の開催記念プロジェクトとして開催される。図1. Peter G./2. Martin Honzik/3. Johannes Gees /4. Flavia Sparacino/5. Calibration Grids/6. John Gerrard/7. 8. 9. Rafael Losano-Hemmer/10. Harald Schmutzhard/11. Anya Lewin /12. Noel Douglas/13. Julie Andreyev/14. Maya Kalogera



